

## 三階西病棟この1年を振り返って

三階西病棟看護科長 工藤 仁美

平成15年を振り返ると、例年に変わらず入院退院を繰り返す患者様の出入りの激しい日々の中に、過ぎていったように思われます。この1年の間に40床の病棟を、空床利用でおいでになった患者様もあわせて、1751人の方にご利用いただきました。

産科の動きとしては、12週以降の死産・早産・帝王切開分娩を含めて月平均37.5件1年をとおして450件の分娩がありました。手術の件数は、帝王切開を含み日帰りの子宮内容清掃術・コンジローマ切除から、術後の化学療法までを必要とする準広汎摘出手術を入れると月平均22.4総数269件となりました。その他では産婦人科の入院の目的の多くは、悪阻・切迫流産治療ですが、めだつて増えたのが、科学療法を目的とした日帰り入院の患者さまでした。

他方小児科の入院数は、一般病床では月平均54.6人1年を通して655人の病児が13床のベッドを利用し、未熟児を含め生後間もない病児の入院は155人の総数810人でした。小児科入院は呼吸器系の疾患が多く、炎症性疾患である肺炎・気管支炎・上気道炎等で357人、その他喘息・クループ症候群が44人、ついで多いのは消化器系疾患の胃腸炎86人と一般病床入院の約75%を占めていました。その他では熱性ケイレン・尿路感染も少なくありませんでしたが、膵炎・ネフローゼ症候群での反復入院の患者様もおられました。それと外して考えられないのが、先天性の疾患をもち余病併発によるお子さんの反復長期にわたる入院でした。

新生児・未熟児室に目を転じると入院の多くは、高ビリルビン血症での光線療法目的入院、低出生体重児・早産児ほか、出生時の一過性の呼吸不全

などが主ですが、この1年間の特徴としては、ここ数年間ではなかった呼吸器使用の長期管理の入院児が4名いたことです。

以上の入院の患者さまを受け入れる私たちは、産婦人科は4月に異動はありましたが川村医長を中心に3名が、小児科は大きく入れ替わり、滝本副院長が退職され、室野医長を中心に現在は4名の医師が診療にあたっております。看護ケアにあたるスタッフも退職・新採用・院内異動と出入りの多い年でした。この1年で大きく変わった事は、看護部の方針により各病棟係長2人体制となり、当病棟も以前からの信岡係長に加え北田助産師が係長に昇格し、病棟の組織としてより磐石な物となり、より質の高い看護サービスの提供が期待できるものとなりました。

15年度の病棟目標は、スタッフの“和”を一番に上げ勤務を進めてきましたが、入退院が多く、患者数の増減の激しい病棟の特徴から、スタッフにかかるストレスも少なくなかったと思われました。ただ勤務の大変さばかりでなく若いスタッフの多い中で、お目出度いことも多くあり久々に3人の新妻スタッフが誕生し、来年は出産ラッシュもあるのではと考えております。

家庭を持ち子育て真最中のスタッフたちも多く居りますが、その苦労や経験は私たちの病棟では大変貴重なものであり、必ずや看護ケアにプラスとなり生かされると考えます。ですから3病棟では皆で協力し、互いに支えあってよりよい看護サービスの提供に結びつけていきたいと考えております。オーダーリングシステムにもだいぶなれ、何とか使いこなせるようになったつかの間、今は平成16年度開始の固定チーム制始動に向けてスタッフ一丸となって準備を進めております。